

〔実践研究〕

大学生のアダプテッド・スポーツ関連授業受講による教育効果の検討  
～障害者との関わり，および障害者イメージに着目して～

加地 信幸<sup>1</sup>・河野 喬<sup>1</sup>・相川 貴裕<sup>1</sup>

**Educational Effects of Adaptive Sports Classes by University Students  
– Focusing on the relationship with people with disabilities and the image of  
people with disabilities –**

Nobuyuki KAJI, Takashi KAWANO, Takahiro AIKAWA

**Abstract**

The purpose of this study is to examine the educational effects of classes by conducting a questionnaire survey on the relationship with people with disabilities and the image of people with disabilities after taking the compulsory subjects of the Department of Sport Health and Welfare of the Faculty of Human Health, Hiroshima Bunka Gakuen University, “Seminar in Adaptive Sports Science” (first semester) and “Practical Adaptive Sports Skills” (second semester). The survey conducted a questionnaire survey on the relationship with people with disabilities and the image of people with disabilities after each class. Each class was held 15 times, and at the end of the 15th class, a survey was conducted using the same questionnaire. The results of this study suggest that after taking the compulsory subjects of the Department of Sports, Health and Welfare, Faculty of Human Health, TUFS, there was a certain educational effect that brought about a positive change in the relationship with people with disabilities and the image of people with disabilities.

**Keywords:**

アダプテッド・スポーツ (Adapted sports), 教育 (Education), 障害者 (People with disabilities), 大学生 (University student),

**I. はじめに**

**1. 大学におけるアダプテッド・スポーツ関連授業について**

本学人間健康学部スポーツ健康福祉学科は2018年開設当初より，日本パラスポーツ協会公認の初級障がい者スポーツ指導員の資格取得を必須とし

ており，第1期生は106名，第2期生は107名が資格取得した。また，中学校・高等学校保健体育の教員養成課程も設置しており，72名（2022年度）の学生が教員養成課程を履修している。教員養成課程では，体育の専門性と障害児指導の専門性の両方を高めることが要求されており（齊藤・2008），中学校・高等学校保健体育教員養成をお

---

<sup>1</sup> 広島文化学園大学 (Hiroshima Bunka Gakuen University)

こなう大学の47.9%が障害者スポーツ関連授業を開講し、その7割近くが実技を実施している現状がある（藤田ら・2014）。こういった社会の流れのなかで、「アダプテッド・スポーツ」という言葉が用いられるようになってきている。アダプテッド・スポーツとは、ルールや用具を対象者にadapt（適合）させることで、誰でも楽しむことができるよう工夫されたスポーツのことであり、矢部（1997, 2004）がAdapted physical activityの訳語として提唱した言葉である。障害者だけでなく、小さな子どもや高齢者、体力の低い者なども対象にしており、競技スポーツだけでなく、レクリエーションも含む概念である。大山（2015）は、アダプテッド・スポーツは、障害者のスポーツ振興のみならず、障害の有無に捉われずに共にプレーできるという視点が、インクルーシブな社会形成に繋がると述べている。

大学の授業でもアダプテッド・スポーツを扱う事例が増えてきており、授業の展開方策や実践効果について知見が蓄積されはじめている（佐藤・2012, 曾根・2016）。しかし、アダプテッド・スポーツという用語や意味については、障害者スポーツに比べて大学生にほとんど知られていない（永浜・2013）。また、永浜・藤村（2011）は、スポーツ方法演習（アダプテッド・スポーツ）を履修した学生が、授業を通して障害者理解が促進したものの、高齢者も含み「全ての人」というアダプテッド・スポーツの理解については不十分であったことを報告し、概念の丁寧な説明や、道具やルールの工夫が行えるという柔軟な思考を喚起する学習内容が必要だと述べている。同様に三浦・小田（2011）も、大学においてアダプテッド・スポーツ授業を実施する際は、学生自らが積極的に考えて工夫できるスポーツ開発・実践の機会提供が重要であると指摘している。なお、実践・効果の検討にあたっては、「その人に合ったスポーツ」という本質からすると、運動能力や体格の異なる学生が混在する授業においてこそ、重要な示唆を得られるものと考えられる。加えて、「体育」にインクルーシブな授業展開が期待されている（草野・

2003）ことから、「専門が異なる学生が混在する一般体育」において、「学生自身が工夫してスポーツを楽しむよう設計された実技」をおこなえることがモデルケースとして望ましいと考えられる。しかし、そのような授業が実践されているケースは非常に少ない。

## 2. 本学のアダプテッド・スポーツ関連授業

本研究で扱ったアダプテッド・スポーツ関連授業は、本学人間健康学部スポーツ健康福祉学科で2020年度に開講された必修科目「アダプテッド・スポーツ科学演習」（前期授業）、および「アダプテッド・スポーツ実技」（後期授業）であった。何れの授業もコロナ渦の影響を受けオンライン形式と対面形式を併用して実施した。

授業の目的（ねらい）については、「アダプテッド・スポーツ科学演習」が、「アダプテッド・スポーツの実践者・指導者として必要な基本的知識・技術、健康や安全管理を重視した指導方法等を実技及びロールプレイを通じて学習させることを目的とする。」であった。「アダプテッド・スポーツ実技」が、「アダプテッド・スポーツを体験的に学ばせ、また障害の特徴を理解させることによって、その障害のある人にできるスポーツについて指導上の留意点を説明したり、スポーツのすばらしさを伝えたりすることができるようになることを目的とする。」であった。

授業の内容は表1.2に示す通りである。「アダプテッド・スポーツ科学演習」では、はじめに障害者理解やスポーツの実践について学ばせた後、個人、およびグループで障害者を対象としたパラスポーツ種目を考案させ、ロールプレイによりグループ報告させた。「アダプテッド・スポーツ実技」では、アダプテッド・スポーツ実技を通じてスポーツの特徴とルール、および指導上の留意点について学ばせた。実施したパラスポーツ種目は、車いすバスケットボール、シッティング・バレーボール、障害者フライングディスクであった。

これらのアダプテッド・スポーツ関連授業を受講した大学生を対象に、授業の教育効果について、

表1 アダプテッド・スポーツ科学演習（前期授業）内容

回	講義内容	講義形式
1～10	・対象者となる障害者の理解 ・アダプテッド・スポーツ競技の実際 ・アダプテッド・スポーツの指導上の留意点と工夫 ・新しいアダプテッド・スポーツの考案（個人・グループ）	オンライン形式
11～15	・新しいアダプテッド・スポーツのグループ発表（ロールプレイ）	対面形式

表2 アダプテッド・スポーツ実習（後期授業）内容

回	講義内容	講義形式
1～8	・アダプテッド・スポーツの特徴とルール、および指導上の留意点 ① 障害者フライングディスク ② 車椅子バスケットボール ③ シットイングバレーボール	オンライン形式
9～15	・アダプテッド・スポーツ体験 ① 障害者フライングディスク ② 車椅子バスケットボール ③ シットイングバレーボール	対面形式

特に障害者との関わり、および障害者イメージに着目して検討し、その成果を明らかにすることは意義があると考ええる。

## Ⅱ. 研究の目的

本研究の目的は、本学人間健康学部スポーツ健康福祉学科の必修科目である、「アダプテッド・スポーツ科学演習」（前期授業）、「アダプテッド・スポーツ実技」（後期授業）を受講した後に、障害者との関わり、および障害者イメージに関するアンケート調査を実施し、授業の教育効果について検討しようとするものである。

## Ⅲ. 方法

### 1. 調査の対象、および方法

調査の対象としたのは、本学人間健康学部スポーツ健康福祉学科において必修科目「アダプテッド・スポーツ科学演習」（前期授業）（以下：前期授業）、および「アダプテッド・スポーツ実習」（後期授業）（以下：後期授業）を履修（2020年度）し、調査協力の意思のあった前期授業115名、後期授業122名の学生であった。

調査の方法は、前期授業、後期授業の履修学生に対して各授業後に「障害者との関わりと障害者イメージに関するアンケート調査」を実施した。授業は各15回実施され、15回目の授業終了時に同様の質問項目によるアンケート調査を実施した。質問紙の回収率は、前期授業93.5%、後期授業98.3%であった。

### 2. アンケート調査の質問項目、および回答

アンケート調査項目、および回答は、表3に示す通りである。

「1 基本項目」のうち、「接触した障害者の障害種」については、回答のしやすさを考慮し、先行研究（大山・増田・2016）を参考として、「身体障害（手や足）」、「視覚障害」、「聴覚障害」、「知的障害」、「精神障害」、「発達障害（自閉症やLD）」、「重度・重複障害」、「その他の障害」と8区分を設定し、「わからない」の選択肢を加えて複数回答により回答を得た。

「2 障害者との接触抵抗」は、「障害者に関わることにどう思いますか」という設問について、「1. 抵抗がある」、「2. 少し抵抗がある」、「3. どちらともいえない」、「4. あまり抵抗はない」、「5. 抵抗はない」、「6. もともと抵抗は

表3 アンケート調査の質問項目、および回答

アンケート調査の質問項目		回答
1 基本項目 (①②選択形式, ③選択形式, 複数回答)	① 性別 ② 障害者との接触経験の有無 ③ 接触した障害者の障害種	① 男性, 女性 ② あり, なし ③ 身体障害(手や足), 視覚障害, 聴覚障害, 知的障害, 精神障害, 発達障害(自閉症やLD), 重度・重複障害, その他の障害, わからない
2 障害者との接触抵抗 (選択形式)	障害者に関わることにどう思いますか	1. 抵抗がある, 2. 少し抵抗がある, 3. どちらともいえない, 4. あまり抵抗はない, 5. 抵抗はない, 6. もともと抵抗はない
3 障害者との今後の関わり (選択形式)	障害児者と今後もかわってみたいですか	1. とても思う, 2. 少し思う, 3. どちらともいえない, 4. あまり思わない, 5. まったく思わない
4 障害児者のイメージ (①から⑩選択形式)	① かわいそう ② 暗い感じ ③ 怖い感じ ④ 元気がない ⑤ 生活するのが難しい ⑥ 一人では何もできない ⑦ 一緒に生活するのは困難 ⑧ 障害がなくてよかった ⑨ 困っている時は助けたい ⑩ スポーツするのは危ない	1. とてもそう思う, 2. 少しそう思う, 3. どちらともいえない, 4. あまり思わない, 5. まったく思わない
5 授業の感想 (①選択形式, ②自由記述)	① この授業を受けて良かったか ② 授業を通しての感想について書いてください	① 1. とてもそう思う, 2. そう思う, 3. どちらともいえない, 4. あまりそう思わない, 5. そう思わない ② 自由記述

ない」の6件法によって回答を得た。

「3 障害者との今後の関わり」については、「障害者と今後もかわってみたいですか」という設問について、「1. とても思う」、「2. 少し思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまり思わない」、「5. まったく思わない」の5件法により回答を得た。

「4 障害者のイメージ」は、先行研究(安井・2004)を参考として「①かわいそう」、「②暗い感じ」など10項目を設定し、「1. とてもそう思う」、「2. 少しそう思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまり思わない」、「5. まったく思わない」の5件法によって回答を得た。

「5 授業の感想」は、「①この授業を受けて良かったか」という設問について、「1. とてもそう思う」、「2. そう思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまりそう思わない」、「5. そう思わない」の5件法と、「②授業を通しての感想に

ついて書いてください」という設問について、自由記述によって回答を得た。自由記述については、記述内容の誘導や限定を避けるため、「授業を通しての感想」というテーマのみ提示し、字数や体裁、内容については全て任意とした。

### 3. 倫理的配慮

アンケート調査にあたっては、質問紙を受講者全員に配付し、授業評価には影響するものではないこと、個人情報適正に管理し目的以外のことについては使用しないことを口頭で説明し、調査項目を示し、調査の目的を理解した上で調査協力の意思がある者のみ回答するよう依頼した。

### 4. 分析方法

「1 基本項目」は、単純集計によってまとめた。

「2 障害者との接触抵抗」については、「1. 抵抗がある」、「2. 少し抵抗がある」を否定的回

答,「4. あまり抵抗はない」,「5. 抵抗はない」,「6. もともと抵抗はない」を肯定的回答とし,前期授業・後期授業の割合を比較した。

「3 障害者との今後の関わり」については,「1. とても思う」,「2. 少し思う」を肯定的回答,「4. あまり思わない」,「5. まったく思わない」を否定的回答とし,それぞれ前期授業・後期授業での割合の変化を確認した。

「4 障害者イメージ」は,主に偏見や否定的イメージについて確認する項目が多いため,「1. とてもそう思う」,「2. 少しそう思う」を肯定的回答,「4. あまり思わない」,「5. まったく思わない」を否定的回答として,前期授業・後期授業で各項目の割合を調査した。

「5 授業の感想」のうち,「この授業を受けて良かったか」という設問については,「1. とてもそう思う」,「2. そう思う」を肯定的回答,「4. あまりそう思わない」,「5. そう思わない」を否定的回答として前期授業・後期授業の割合を調査した。「授業を通しての感想について書いてください」の自由記述の分析については,テキストを質的に分析した大山(2015)の手法を参考に,使用頻度の多かった内容の意味を解釈し抽象化した概念を3つのカテゴリに分類した。

## Ⅳ. 結果と考察

### 1. 基本項目

「①性別」(選択形式)は,前期授業が,女性28名(24.3%),男性87名(75.7%),後期授業が,女性27名(22.1%),男性95名(77.9%)であった。「②障害者との接触経験の有無」(選択形式)は,「あり」と回答した者は,前期授業78名(67.8%),後期授業91名(74.6%)であった。「③接触した障害者の障害種」(選択形式,複数回答)は,前期授業では,身体障害(手や足)が8名,視覚障害が1名,聴覚障害が5名,知的障害が15名,精神障害が2名,発達障害(自閉症やLD)が20名,重度・重複障害が12名,その他の障害が1名,わからないが14名であった。後期授業では,身体障

害(手や足)が13名,視覚障害が1名,聴覚障害が4名,知的障害が23名,精神障害が3名,発達障害(自閉症やLD)が26名,重度・重複障害が12名,その他の障害が1名,わからないが39名であった。

調査の対象とした学生は,障害者との接触経験や重度・重複障害者への接触経験が先行研究(塩田・2015)より高い傾向となっていた。これは授業以外で,①福祉を学ぶ学生がボランティア活動や社会福祉実習を経験していること,②教職希望者が社会福祉施設や特別支援学校で介護等体験を終えていること,③筆頭筆者が代表を務める重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ教室にボランティアとして定期的に参加していることなどから,障害者や重度・重複障害者への接触経験の多さにつながっていると考えられる。

### 2. 障害者との接触抵抗

「障害者との接触抵抗」(選択形式)の割合を前期授業・後期授業で比較したところ,前期授業の肯定的回答の割合は67.8%,否定的回答の割合は19.1%,後期授業の肯定的回答の割合は63.9%,否定的回答の割合は15.6%であった。

この結果も,先行研究(塩田・2015)と比較すると,前期授業終了時点ですでに障害者に関わることへの抵抗感が低かった。基本項目の調査結果で示した通り,調査の対象とした学生は,すでに授業外で障害者との接触経験が多いという結果であったが,およそ7割近くの学生が障害者との接触抵抗について肯定的に回答している。この結果は,アダプテッド・スポーツの体験的な学びを通じて,障害の特徴を理解させること,障害のある人にできるスポーツについて指導上の留意点を説明したり,スポーツのすばらしさを伝えたりすることができるようになることなど,授業のねらいであげている内容と一致すると考える。

### 3. 障害者との今後の関わり

「障害者との今後の関わり」(選択形式)の回答結果を前期授業・後期授業で比較したところ,前

期授業の肯定的回答の割合は74.8%、否定的回答の割合は2.6%、後期授業の肯定的回答の割合は69.7%、否定的回答の割合は4.1%であった。

この結果について先行研究（大山・2017）と比較すると、前期授業・後期授業とも今後の障害者との関わりを望んでいる学生が多いという結果であった。この結果は、アダプテッド・スポーツ関連授業の学びを通じて、障害者との接触経験の多い学生を含め、多くの学生が今後も障害者に関わりたいたいと感じてくれた成果であると考ええる。

#### 4. 障害者のイメージ

「障害者のイメージ」（選択形式）の前期授業・後期授業の結果をみると、「①かわいそう」から「⑩スポーツをするのは危ない」の10項目すべての項目で、肯定的回答の割合が6割以上を占めた。特に、「②暗い感じ」というイメージが無くなった」の肯定的回答の割合は前期授業が87.8%、後期授業が81.1%、「③怖い感じ」というイメージが無くなった」の肯定的回答の割合は前期授業が80.9%、後期授業が77.0%、「④元気がない」というイメージが無くなった」の肯定的回答の割合は前期授業が87.8%、後期授業が80.3%と肯定的回答の割合が特に高かった。この結果については、実際の授業において、動画教材やテキストなどを活用して、障害者がアダプテッド・スポーツを健常者と同様に楽しく積極的に行っている場面を見せたり、アダプテッド・スポーツを体験的に学ばせたりすることを通じて、障害の特徴や障害者も工夫をすればスポーツは可能であるといった理解へとつながり、障害者のイメージに対する肯定的回答の割合が高くなったことが考えられる。

「⑧障害がなくてよかった」の肯定的回答の割合は、前期授業が39.1%、後期授業が45.1%であった。この結果は、学生たちが授業での学習を通じて障害者理解が一定程度進んだことと同時に、障害者であることの困難さについて深く理解できたことなどが考えられる。「⑨こまっているときは助けたい」の肯定的回答の割合は、前期授業が54.8%、後期授業が59.0%、否定的回答の割合も

前期授業が32.1%、後期授業が25.4%であった。これは、授業での障害者スポーツ指導者としての指導上の留意点を学んだことにより、障害者の自立を阻害してしまうことのないよう適切な実態把握をした上で、必要なことのみについて助けていくこと、必要な支援を行うことの重要性を理解したことなどが考えられる。

また、「⑩スポーツするのはあぶない」の肯定的回答の割合は、前期授業が76.5%、後期授業が63.0%であった。これは、後期授業で学習させた車椅子バスケットボールにおいて、「人との激しい衝突や転倒による怪我の危険性があると感じた（自由記述回答）」など、アダプテッド・スポーツも危険を伴うスポーツである一面もあることについて理解したことなどが考えられる。しかしながらパラリンピック種目には、車椅子バスケットボールのほか、車椅子ラグビーやブラインドサッカーなど人との激しい衝突・接触や怪我の危険を伴う種目もあり、指導者としてどのように指導すれば安全に実施できるのか、また、アクシデントが発生した際にはどのような対応をするのかについて学ばせていくことが重要であると考ええる。

#### 5. 授業の感想

「①この授業を受けて良かったか」（選択形式）という設問については、前期授業の肯定的回答の割合は99.1%、否定的回答の割合は0%、後期授業の肯定的回答の割合は93.4%、否定的回答の割合は0.8%であった。ほとんどの学生から肯定的回答が得られたことから、アダプテッド・スポーツ関連の授業が学生にとって有益で興味深いものであったと考える。

「②授業を通しての感想について書いてください」（自由記述）という設問については、テキストを質的に分析した大山（2015）の手法を参考に、自由記述のうち使用頻度の多かった内容の意味を解釈し抽象化した概念について「①障害者への理解の深まり」、「②アダプテッド・スポーツへの理解の深まり」、「③アダプテッド・スポーツを楽しむ場」の3つのカテゴリに分類した。

「①障害者への理解の深まり」では、障害の特徴や障害者への配慮、障害者に対する認識の変化についての記述があった。「②アダプテッド・スポーツへの理解の深まり」では、アダプテッド・スポーツの概念や意義の理解、各種スポーツ用具に関する具体的な気づきなどについて記述があった。「③アダプテッド・スポーツを楽しむ場」では、アダプテッド・スポーツに対する楽しさの実感、興味関心の喚起や意欲の向上に関する記述があった。

自由記述の内容を分析した結果、学生たちは授業受講を通じて、自身の障害者に対する認識や価値観に変化が生じたことや、視野の広がりや自覚や認識の変化が見られたことなどについて実感している記述があった。自由記述の内容についても肯定的な記述がほとんどであり、学生たちが楽しく意欲的に授業受講できたことにより、障害者、およびアダプテッド・スポーツに対して理解が深まり、肯定的回答が多く得られたことが考えられる。

## V. 結論

本研究の結果、本学人間健康学部スポーツ健康福祉学科の必修科目である、「アダプテッド・スポーツ科学演習」（前期授業）、「アダプテッド・スポーツ実技」（後期授業）を受講した後に、障害者との関わり、および障害者イメージに対して、肯定的な変容をもたらす一定の教育効果があったことが示唆された。

## VI. 今後の展望

本研究は、コロナ禍の影響を受け、オンラインと対面を併用したアダプテッド・スポーツ関連授業を受講した本学大学生を対象に、授業の教育効果について、特に障害者との関わり、および障害者イメージに着目して検討した。

今年度（2022年度）は、コロナ禍に対応した対策を講じながらアダプテッド・スポーツ関連授業

を対面授業で実施しており、授業の内容については先行研究において指摘された内容に対応するよう授業実施に取り組んでいるところである。特に、アダプテッド・スポーツの概要を丁寧に説明した上で、個人、およびグループでスポーツの道具やルールを独自に工夫させたり、身近にあるものを活用したスポーツ用具を作製させたりするなど、学生自らが積極的に考える機会の提供、および柔軟な思考を喚起させる学習内容となるよう指導している。

今後も授業実践、および研究を継続し、望ましいアダプテッド・スポーツ授業のモデルケースの実現に向けた教育効果の検討を継続課題とした。

## 謝辞

本研究にご協力くださいました、本学部の授業担当者の専任教員をはじめ、非常勤講師の皆様、学生に対しまして心から感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 齊藤まゆみ (2008) : A県小学校における障害のある児童の体育実施状況. スポーツ教育学研究, 27(2) : 73-81.
- 2) 藤田紀昭・金山千広・河西正博 (2014) : 保健体育教員免許の取得可能な大学における障がい者スポーツ関連科目の実施状況に関する研究. 同志社スポーツ健康科学, 6 : 29-37.
- 3) 矢部京之助 (1997) : アダプテッド・スポーツの提言. ノーマライゼーション, 12 : 17-19.
- 4) 矢部京之助 (2004) : アダプテッド・スポーツとは何か. アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～, 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄 (編著), 市村出版 : 3-4.
- 5) 大山祐太 (2015) : 大学資源活用によるアダプテッド・スポーツの振興とその意義-共生社会を目指す視点から-. 芸術・スポーツ文化学研究, 大学教育出版 : 62-80.

- 6) 佐藤紀子 (2012): 「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響. 日本大学歯学部紀要, 40: 49-56.
- 7) 曾根裕二 (2016): アダプテッド・スポーツの体験が体育専攻学生の障害理解に及ぼす影響. 大阪体育大学健康福祉学部研究紀要, 13: 53-62.
- 8) 永浜明子 (2013): 「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル: アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第3報). 大阪教育大学紀要. 第5部門教科教育, 61(2): 47-60.
- 9) 永浜明子・藤村弘子 (2011): アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第1報)-アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から-. 大阪教育大学紀要第V部門, 60(1): 39-49.
- 10) 三浦敏弘・小田慶喜 (2011): 健康を支援するスポーツ文化研究-アダプテッドスポーツ理解への授業研究-. 人間健康学研究, 3: 19-29.
- 11) 草野勝彦 (2003): 改めて体育の可能性を問う-体育でノーマライゼーションの具体化を-. 体育科教育, 8: 10-13.
- 12) 大山祐太・増田貴人 (2016): スポーツ系コース在籍学生の障害者との接触意欲とスポーツ実施困難についての認識. 弘前大学教育学部紀要, 115(1): 89-95.
- 13) 安井友康 (2004): 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響. 障害者スポーツ科学, 2
- 14) 大山祐太 (2015): 知的障害者のスポーツ活動における指導記録の記述に関する検討. アダプテッド・スポーツ科学, 13: 11-22.
- 15) 塩田琴美 (2015): 障害者の接触経験と障がい者スポーツ参加意欲・態度との関係性. 日本保健科学学会誌, 18(2): 59-67.
- 16) 大山祐太 (2017): 大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果. 北海道教育大学(教育科学編), 67(2): 267-276.